

しては大いに批判的である。そこにおいて、非キリスト教徒の両親と名付け親とは口先きだけで、なんらはたす気のない誓約を行うのである。著者はこの嘆かわしい状態を改良するための提案をする。彼は主として聖公会の人々に対して語りかけているが、我々の中で日本の聖公会ではない教会に属するものもまた、彼の議論によって幼児洗礼の意義を深く再考するように挑戦されるのである。

著者が与える2つの興味ある、かつまた実際的な提案は Parish Communion (第10章) 及び、教会の熱心な会員が、キリスト者ではない家族の子供の代父母をひきうけることである。

第11章では学校における礼拝がとりあつかわれ、とりわけキリスト教主義の学校に対して特別な言及がなされている。著者は学校礼拝の限界と共にその役割と機能とを素描している。この章は日本の読者にとって、特にキリスト教主義の学校の管理と宗教生活とにたざざわっている人々にとって、最も貴重なそして最も有益なものであろう。

本書は主としてキリスト者である両親のためのものである。非キリスト教的な家庭からきている子供達が圧倒的に多いクラスをうけもつ（日本においてはしばしばそうであるように）教会学校教師は、本書を読むことによって多くの挑戦と非常に困難な問題とを与えられるであろう。我々みんなが本書において提供されている礼拝と祈りに関する洞察から多くのことを得ることができるけれども、本書は主として聖公会の読者に与えられたものである。（ジーンB.ロイド、森 泰男訳）

Einar Molland, *Christendom, the Christian Churches, their Doctrines, Constitutional Forms and Ways of Worship*, A. R. Mowbray & Co., 1959, 418 pp.

本書の著者モーランド博士は現在オスロ大学の教会史教授で、英国、フランス、ドイツ等に学んだ経験を持ち、それらの国の教会の事情に通じている。彼は1933年に按手を受領した教職でもある。

本書のねらいは、著者も自序において述べているように、キリスト教界のすべての教会と教派を公平に記述することである。このような研究は比較信条学 (Konfessionskunde) の領域に属する。比較信条学は16世紀の論争神学にその端を発するが、当時の主な関心は諸教会の教理的相違を強調し、自己の立場を正当化することであった。しかしそのような独断はやがて超えられ、「なぜ」そしてまた「いかにして」そのような相違が出てきたかという歴史的研究が進められるようになった。更に人々は、教会全体をもうらす敘述を教理の面に注目するだけでは十分ではない、教会の特徴は教理、教憲（教会の組織）、礼拝様式及びエトス（ある特定の信仰告白に関連した特徴的な生活態度）の4つの面から見られなければならないことに気づいた。本書の著者は、諸教会を比較する際、いかなる独断をも排して、客観的、記述的研究を進める。そこで客観的であろうとして著者が採用する方法は、各教会が中心的と考えているものに著者自身が立ってその教会を敘述することで

る。そのために著者はできるだけ原資料にあたり、更に、その限界を知りつつも、統計的資料をも参考にしようとするのである。

以上のような態度と方法をもって、著者は諸教会を吟味して行くのであるが、どの教会から始めればよいのであろうか。著者によると、キリスト教界は左翼と右翼とに分けられる。「右翼」という名称は保守主義や伝統に対する忠誠のような特徴を含む。このタイプの教会はその教理、教憲及び典礼において初代教会及び中世の教会の多くのものを継承している。他方「左翼」の教会はそれらの伝統を棄却したり、あるいは喪失したりしている。このような類型化に基づいて考えて行くと、諸教会は一定の連続線上に排列される。従って著者は、この類型化の結果に基づいて、右翼の教会からその研究を始めるのである。この類型化のもう1つの利点は、大体において、諸教会はそれらが出現し、その特徴を得た順序において考えられることである。そこで著者は次のような順序で諸教会を研究して行く。

オーソドックス教会（附録、ロシアの分派）、他の東洋の教会（アルメニア教会、東シリア教会、西シリア・ヤコブ教会、マル・トマ教会、コプト教会、エチオピア教会）、ローマ・カトリック教会（附録、東方の帰一教会）、復古カトリック教徒、カトリック使徒教会、英国聖公会及びアングリカン・コミュニオン、南インド教会、ルーテル教会、モラヴィア教徒、改革派教会（附録1、ウァルドー派教会、附録2、新宗教団体発生の背景としてのピュリタニズム）、メソヂスト教会、会衆派教会、バプテスト教会、ディサイブル教会、ペンテコステ派、救世軍、プリマス・プレズレン、新エルサレム教会、アドベントイスト教会、基督友会、ユニテリアニズム、クリスチャン・サイエンス、エホバの証者、モルモン教。

我々はまずこの一覧表がキリスト教界のほとんどすべての教会をもうらしていることに驚ろかされる。著者は各々の教会を上述した4つの面から研究して行き、各々の教会の特徴と中心がどこにあるかを理解しようとし、次に、その中心から他の3つの面を有機的にとらえようとするのである。

著者はまずオーソドックス教会について研究する。第1節において、名称、分布及び統計的資料を調査し、オーソドックス教会の歴史及び現状を報告している。次に第2節において、著者は、この教会の特徴を調べた結果、オーソドックス教会の特殊な性格は就中その典礼に示されていることを指摘する。彼は第3節においてこの教会の教理、第4節において礼典、第5節において礼拝、第6節において教憲をそれぞれ取り上げている。著者は、オーソドックス教会の中心は典礼にあることを知ったので、礼拝に多くの紙数をさいているが、教会法の法典化を好まないオーソドックス教会において余り重要でない教憲に関しては少し触れているだけである。

ローマ・カトリック教会を研究した時、著者は、この教会の中心は教会法にあり、その特徴である法的な考え方はこの教会のあらゆる分野において見られることを指摘する。そこで彼はこのような理解に立ってこの教会の教理、礼典、礼拝、カトリック教徒のエトスを見て行くのである。

著者は、当然のことながらオーソドックス教会、ローマ・カトリック教会、ルーテル教会、改革派教会のような大きい教会に対しては多くの紙数を費している。しかしそれは、著者が小教会を軽視していることを意味するものではない。むしろ、序においてグリーンスレイドも言うように、著者は小さい教会に対して温かい同情を寄せている。それにもかかわらず彼が大教会に多くの紙数を費したのは、それらは小さい教会のあるいは母胎であり、あるいは対立者であるからである。それらの大きい教会を十分に理解することにより小さい教会の立場をよりよく理解しえるのである。しかしだからといって、著者は小さい教会あるいは分派に言及しないで通りすぎることはしない。それは、小さな教会は小さい教会として大きい教会の中には解消されない存在意義を彼らなりに有しているからである。小さい教会に対する著者の温かい同情の一端を知るために、基督友会に対する彼の研究を取り上げてみよう。

著者は第1節において基督友会の起源及び歴史を述べた後、この教会の特徴として、信仰箇条、礼典、^{イエス・クリス}聖務のいずれをも欠くことをあげている。クエーカー教徒はいかなる外的権威をも排し、いかなる形式をも絶対としない。このような彼らの主張をきく時、ある保守的な人々は彼らをキリスト教界の外に置こうとするが、著者は彼らの意図を正しく理解する。彼らは正統的キリスト教信仰をもっている。それにも拘らずそれらを信仰箇条の形にまとめないのには2つの理由がある。(1)真理は必ずしも常に確立されるわけではない。(2)信仰告白も、それが経験され、その内容が行為において実践されないと、価値がない。モータンド博士はこれらの主張の背後にある神秘主義的敬虔を認め、しかも教団において秩序が保たれていることを認める。かくして著者はクエーカー派をキリスト教界の内に入れるのである。

本書の著者は小さい教会に対して同情ある態度で接していると述べたが、キリスト教界の外にある宗教団体に対してはかなりきびしい批判を投げかけている。それはなぜであろうか。

著者によると、「キリスト教的と認めらるべき教団のいずれにも現在しなければならない唯一の特徴がある。すなわち、イエス・キリストを神の子、ままた教主と信じる信仰である」(356 ページ)。彼の理解はWCCの見解と一致する。すなわち、WCCの会員資格はイエス・キリストを「神また主」と認めることである。ではこの境界線はどこに存しているのか。著者は上述した一覧表においてユニテリアニズム以下4つの宗教団体をキリスト教界の外におく。ここではエホバの証者を1例として取り上げて、彼らに対する彼の批判をみてみよう。

エホバの証者は聖書をしばしば用いるが、彼ら自身の立場からのみ聖書を解釈するのであり、むしろ、彼らの説を実証するために聖書の言葉を流用するにすぎない、と著者は言う。彼らは三一神を斥ける彼らのキリスト論は粗野な形のアレイオス主義である。彼らにとって、キリストは被造物である。これが彼らの信仰である故に、彼らがいくら礼典を守っても、彼らのエトスがいかにビュリタンの、清潔なものであっても、彼らはキリスト教界の外に置かれるのである。

既に述べたように、本書は比較信条学の領域に属する研究である。この研究方法はすべての教会をあるがままに公平に記述することである。それはそれとして大切な研究であるが、そこには限界がある。すなわち、「真の教会はいかにあるべきか」という問いに関して、この比較信条学はほとんど何も語りえない。その質問と取り組みうるのは聖書神学的及び組織神学的研究にはかならない。著者もこの研究の限界を充分に意識しており、結論において次のように述べている。「聖書、キリスト教の伝統及び健全な教義学原理の基盤の上に立って、何が正しいかを決定することは比較信条学の領域外のことである。……規範的な問題は組織神学の分野に属する」(365ページ)。

そのような限界をもっているけれども、このような研究は基礎的な研究として、教会一致をめざす諸教会にとって必要である。お互を理解するということが教会一致への第一歩だからである。

本書の著者はスカンディナヴィアの人である故に、スカンディナヴィア諸国の教会のことがかなり詳細に記されている。その意味でも本著は貴重な文献である。本書はこのような包括的な研究の皆無に等しい状態にある我が国においては特に貴重な文献であると思う、
(森 泰男)

T. S. Garrett, *Christian Worship: an Introductory Outline*,
London, Oxford University, 1961, 190 pp.

本書は南インド教会における著者の20年間に亘る活動を素地として、インドの神学生や読者の為に著された礼拝学のテキストから、特殊な地方的要素を除去して一般化されたものである。著者は最近のインドにおける礼拝の盛大なる復興に注目し、その事実がエキュメニカル・ムーヴメントに唱和していると評価する。しかもこの事は決して偶然ではなく、また形式的なことでもなく、礼拝の充実、その本来の意義の実現の為に、エキュメニカル・ムーヴメントとの関連が必然的であり、本質的な事柄でなければならないと考えられている。かかる視点と方向とを、聖書に提示されている原初の礼拝の原理に基いて考察し、更に礼拝の歴史的発展と変遷の過程を辿ることによって明らかにしようとする。この意味において、本書に展開されている問題意識と方法論とは、18世紀前半より今日に至る迄、超教派的に起っているリタージカル・ムーヴメントの系列に属するとは云え、明確な目標として「教会一致」という事柄を指示している点で特別な価値がある。

本書の内容は、先ず礼拝の意味が問われ、キリスト教礼拝におけるイスラエルの遺産、洗礼の問題、初期の聖餐の歴史、東方教会における礼拝、西方教会における礼拝、プロテスタント教会の聖餐、接手等に関して歴史的に論述され、全生活的献身としての神への応答、そして最後に、生活に根ざした礼拝という課題が結論的に指示されている。以下において本書の中心思想に触れ、著者の意図するところを提示したい。

礼拝をその事柄自体の目的の面から考えるならば、人間は神の栄光の為に存在するのであり、人間が神を礼拝することは、神の創造の秩序である。神は歴史と関わり、歴史を貫